

# 言語地図における凡例の本質についての研究

江端義夫  
(1991年9月30日受理)

A Study on a Essence of a Legend of the Linguistic Atlas

Yoshio Ebata

Linguistic Atlases seem to be roughly divided into two kinds. One is a map described by dialectical phenomena and the other is the atlas of signs.

This sign-atlas that came from Marburg University in Deutsch, may be more familiar than that.

Two different methods of a legend style are found, too in Japan. One is a KOKURITSU-KOKUGO-KENKYUSHO method, the other is the HIROSHIMA-GAKUHA method. The latter is the legend which means "the structure of dynamic relation of the local languages".

## はじめに

かつて、筆者は、言語地図を用いて言語史を研究する方法に関して、二つの潮流を帰納し、報告したことがある。外国語に不案内であるために、粗雑な観方しかできなかったが、少なくとも、当該学問の歴史的現在を把握する上で、大きな意味があったと思われる。

国立国語研究所が『日本言語地図』全六巻を出版して、地理言語学のめざましい隆盛を招来させてから、社会言語学的研究へと人々の関心が移り、一定の年月が過ぎた。あらためて、国立国語研究所が『方言文法全国地図』を出版しはじめると及び、従来とは異なった認識の下に、言語地図の研究を行うべき段階を迎えたのである。筆者は、位相論的視点を取りこんだ言語地図の研究が望まれるようになった状況を指摘し、当該研究の新しい時代が来たことを小述したことがある。

このような、新しい時代に入った地理言語学の健全な方向を見定めるために、筆者は斯界の進展過程を眺望し、この理の本質に照らして考察することの必要を感じている。方言の研究は、根本的に、ものごとの真実、人間的な真実の究明を目的とするが、常に大切なのは、「なぜ？」を問う精神ではなからうか。

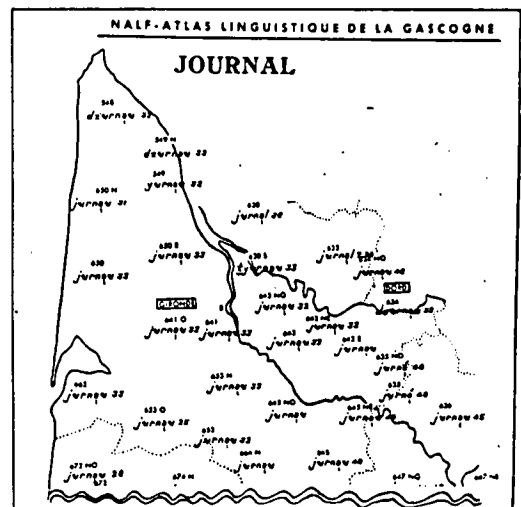
そこで、筆者は、本稿において、日本の地理言語学の展開上、ほとんど問題にされることになかった「凡例」について、問題をなげかけてみたいと思う。実は、ここにこそ、言語地図の本質が現れているのである。

## 一、“事象地図”における「凡例」の意味

上述の「はじめに」の中で、言語地図の地図学的(すなわち、製図学的)方法に二つの潮流のあることを述べた。それは、ロマンス語系の“事象地図”とゲルマン語系の“符号地図”とのことである。

本章で問題とするロマンス語系の“事象地図”は、図①で見られるように、白地図の上に、方言事象が直接に書き込まれる方式のものことである。

図①



図①のJ. Ségyによるフランスのガスコーニュ地方の言語地図では、調査地点番号のすぐ下に、得られた方言事象が、そのまま書きこまれている。忠実な音声表記になっている。複数の語形が並記されている。方言事象は白地図上に出し、意味や用法についての説明は、欄外か脚注に一括してまとめている。

このように、ロマンス語系のフランス語、イタリア語、スペイン語などの言語地図は、およそ図①と同じ手法に則って作図されている。ゲルマン語系の言語地図のように、符号に代弁させて、記号の抽象化を行う操作に出ないのである。資料としての方言事象というものを、まず確実にとらえることが第一段階に存する。その上に、解釈地図が作られて、等語線が引かれたり、地点間の方言距離測定がなされたり、あるいは、方言量の計測が試みられたりして、それらが白地図上に大胆に出されるのである。これが非常に合理的であるために、事象地図の素朴さと解釈図の親さが見事に調和して、科学的なものになっているようである。いわば、素材図としての“事象地図”が目指されている。それを万人共有の財産とした上で、これを利用した自在な解釈図が、白地図上に描述されるものと解される。きわめて明晰である。

日本の言語地図の歴史には、これが全く、根づかなかったのは、不思議である。この手法でならば、言語地図に符号を押してゆく“符号地図”に必要な凡例は、ほとんど不必要なものとなる。

したがって、以下では、ロマンス語系の言語地図における“事象地図”については言及しないことにする。言語地図を研究の方法として活用する際に、凡例が大きな意義をもつのは、“符号地図”に限られるからである。世界の言語地図を研究する上で、ゲルマン語系の流れを汲む学派と、ロマンス語系の流れを汲む学派とが分かれてとらえられることに、注意しなくてはならない。確かに、地理言語学の学的確立はフランスにあると言われてきたし、まとまった成果も、ロマンス語系のものに目立つとされよう。しかし、実に、言語地図に関して、日本の学問土壤には、フランス語系のやり方が定着しなかったことは、一つの事実として認めおかななくてはならない。

## 二、“符号地図”における Deutscher Wortatlas の凡例について

ドイツのG. Wenkerがマールブルク大学で、地理言語学を始めた。調査の実施を通して、19世紀の末における欧州の方言研究のメッカが、この地に築かれたことは、周知のことであろう。その後、マールブルク大学の研究所の所長がWalter Mitzkaになったとき、次

の所長のLudwig Erich Schmittと共同で、通信調査でのDeutscher Wortatlasがつくられ、完結した。これは、日本の方言研究界では、あまり高く評価されていないかに見えるけれども、解釈よりも事実としての符号地図を優先して出版してゆくというものであり、戦後の日本の研究状態とよく似ているので、注目しておきたいと思う。

さて、Wortatlasの10巻の第10図に、「ゆきの花」Schneeglöckchenの凡例と言語地図がある。凡例は次のようになっている。出版は1960年である。

図②

Schneeglöckchen	
I Schneeglöckchen	< März(en)blümchen
L Schneeglöckke	↗ Märzlocke
T Schneeglock(e)	∨ Märzglöckchen
F Schneiglackske	∨ März(e)glöckle
F Schneglöckske	∨ Mätkelöckske
J Schneeglöckel	↗ Märzteck
J Schneglöckle	> Märzschelle
J Schneglöckelchen	— Osterblume
/ Schneblume	└ Osterglocke
/ Schneblümchen	└ Osterglöckchen
J Schneflocke	↖ Dolljöbke
S Schnevelichen	∪ Gollseje
z Schnegrallal	∪ Koaliesblom
∨ Schneklaker	∪ Kulkenblume
∨ Schnegucker	∞ Mengistondlan
∖ Schniegake	+ nakend Wiefkes
b Schneekaderl	∖ nackte Jufferken
p Schneekätter	∖ Naktärsken
∨ Frühlingsblume	○ Sejrüsje
∪ Hornungsblume	∪ Schlangenblume
∪ Hornungglock	f Vorwitzchen
∧ März(en)becher	× wite Wiefkes
∧ März(en)becherchen	∨ Tileuseken, Zinlöseken
< März(en)blume	

Zahlen bezeichnen Seltenheiten und Mehrfachmeldungen

方言事象の群落ごとにまとめられ、標準語形に近い語形から先に並べられている。そして、発想の異なるものが、最後に一括してある。

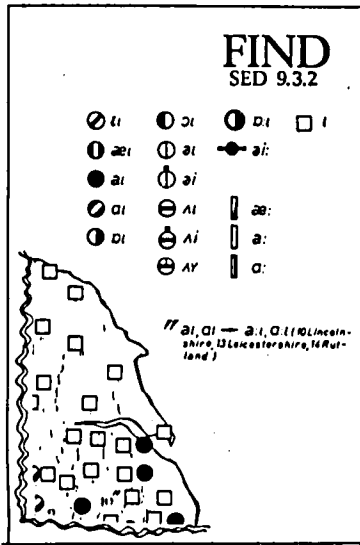
ここで、さらに詳しく、語形の変化と符号の変化との対応を見てみようと思う。事象地図とちがって、この符号地図のばあいは、語形の変化を、どのように解釈して、言語の法則に対応させ、それに見合うべき符号にどう代替してゆかかという点に、研究者の力量が問われているからである。抽象化の作業がここにあり、



#### 四、簡素な凡例に従った, Atlas of English Sounds の実態

Eduard Kolb が1979年に324図を一冊に集載して出版した。これはイギリスの音声地図である。

図④



図④では、イギリス中部のハンバー川河口の一部だけ載せている。/ai/連母音の同化を調べるためのものである。符号は、微妙な音の移行をとらえるように与えられている。明瞭である。話者のコメントなどは、ほとんど見られない。項目の性質によるものと考えられる。体系よりも、現実の発音実相を重視したものとなっている。地域の狭さに対して、符号が大きすぎるために、ドイツの言語地図に親しんできた者にとっては、これが粗野にさえ見えてしまう。しかし、ドイツの調査地点は、限度を越えて詳細なのである。イギリスの場合は、音韻項目でもあるため、このくらいで正常と考えるのがよいと思われる。凡例としての独立した完成度をめざすというよりは、このイギリスの場合のように、あくまでも、言語地図に従属し、読解を手助けするものであるという位置に落ちつかせるのも、一つの見識とすべきものかもしれない。これも一つの立場である。しかし、これを参考にすべきではない。

#### 五、言語間言語地図としての Atlas Linguarum Europae (ALE) に見られる凡例の到達点

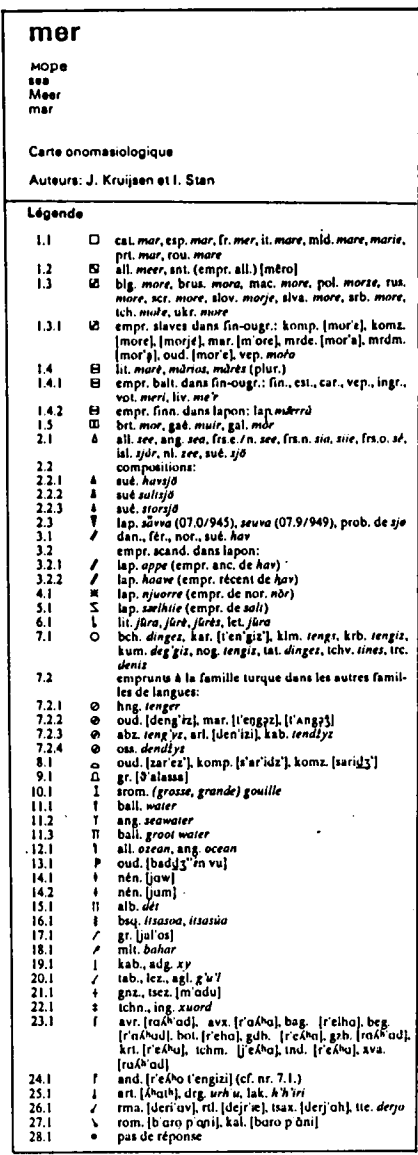
言語地図の製作において、全ヨーロッパの頭脳を結

集させた仕事が、Atlas Linguarum Europae であるといつてよい。1983年に、その第1巻が出た。

一国内の言語地図とはちがって、国境の枠を越えて、語族と方言との関係を、とらえようとしている。日本には、こういう種類の仕事が、今までに存在していない。先達から学ぶべきことがら多い。

図⑤は、ALEの中心的な世話をしている Kruijsen の作った凡例である。これは、コンピュータを利用し、マールブルク大学のプツケ教授を中心とするスタッフが、XYプロッターで作図したものである。オラン

図⑤



ダで Kruijsen らが統括し、作業はドイツでなされている。ALE の全欧協力体制の見事に驚嘆せざるをえない。

凡例の初めに四角符号で、カタロニア語の mar, イスパニア語の mar, フランス語の mer, イタリア語の mare, ポルトガル語の mar などが、一括され、一つにまとめられている。おもしろいのは、この四角系符号が、スラブ語の more, ポーランド語の morze, ブルガリア語の more などへと共通の枠を広げていることである。ドイツ語のばあいも Meer であるから、イギリスなどのアングロサクソン地域での sea, ノルウェー語の zee など、狭い地域を残して、ヨーロッパの広範囲にわたって、mer という唇音 m と流音 r とで海を表す言い方が認められるのである。凡例は、言語間の方言相関表でもある。

ALE の図を眺めていると、言語の恣意性とは言われながら、耳から生の音を聞きとって、意味を覚えてゆくという人間言語のあり方が、事実として示された貴重な成果に、敬意を表さなければならぬ。








ただし、ALE の凡例の符号法には問題がないわけではない。線符号の近似に対して、語形の近似が対応していないばあいがある。全欧を射程におさめているために、一地点一符号となっている。こうした簡略化はコンピューターの利用のために、避けられなかったことかと思う。しかも、フランス国内では、方言と民俗の言語地図が、数十年来の仕事として蓄積されてきており、そこでは、白地図上に方言事象を書きこむやり方の「事象地図」であったが、それらの知恵を通して、ALE の方法を選んだのである。事象地図よりも符号地図の方が、時代に即応しているとされたのである。又、全欧を統合して展望するためには、繁よりも簡を優先させたというのも、注目したい点である。

## 六、日本国における言語地図の凡例

### (1) 「口語法分布図」の凡例について

明治39年に国語調査委員会によって編纂された「口語法分布図」は、色刷りで、凡例は概括的な表示形式

図⑥

						
報告不明な地方	やちだ ヲ並用スル地方	やな ヲ並用スル地方	なだ ヲ並用スル地方	ヤト云フ地方	ちとま 地方	だト云フ地方

になっている。凡例を見ると、「ート云フ地方」とあり、「地点」ではない。科学的具体性に欠ける点が、惜しまれる。抽象のレベルがもう一段階下であることが望ましかった。日本の斯界の出発が、個 individual の発話の伝播や方言の生成流転という境にはなくて、方言の行われる地方を区画したり、指定したりするところに興味が存したことは、凡例のこぼつかいによっても、容易に察することができる。

さて、この方法や見方は、その後、多くの研究者に受け継がれた。が、いきなり「地点」を飛びこえて、「地方」を目ざすのは、手順のルールに反するものとして、敬遠されてきてはいる。

### (2) 「糸魚川言語地図」の凡例について

柴田武博士のお仕事は、地図と解説と英文篇との三点セットで上・中・下巻を成す。豪華である。1988年。

図⑦

△	tampopo	
▽	tampompo, tʃampompo	
▲	tampompon	
/	tampoko	
!	tampuku	
x	tamboku	
x	tajkoro	
○	kuzina	
○	kuzirana	
⊗	kuzirabana	
#	kotsukotsu	
#	katʃikatʃi	▼ kajkan

「タンポポ」の凡例を見ると、凡例が狭いせいかもしれないが、諸事象間の語類の遠近や相似に着目した符号の設定には、あまり関心を示しておられないようである。tampopo が三角であるのに対し、tampoko が斜線である。この対応関係を頭に置くとすれば、次の Kuzina, Kuzirana, Kuzirabana は非常に近い丸系符号になっているのが気にかかる。

コンピューターを用いて言語地図を描くばあい、その媒体の能力に制約されるということがあるのかもしれない。符号の大小も見られない。一列に、冷静な顔をして、それぞれの個性をもった方言事象が整列したものであるというのが、凡例の内容であろうか。

別な言い方をすれば、「分類語彙表」というものが凡例上に示されているとも言えなくはない。しかし、wortatlas で見られたような、語類間に、間隔を設けるという方式は、とっておられない。柴田博士が、かつて、「日本語地図」をつくっておられた時には、語類間の間隔を、設けておられたこともあった。今は、さらに、抽象化を旨とし、余分な情念を排したものとみなされようか。

(3) 「日本語地図」の凡例について

図⑧は、291図「おいしい(美味しい)」の凡例である。全国的に見て共通語形である OISII と、九州の代表的な語形の OISIIKA とを別格として、冒頭に出している。その他は UMAI 系統が一連のものとして序列化された。符号のあて方は、語形の微妙な変化をよくとらえたものになっている。こういう方法は、先にドイツの wortatls で確認したが、それをもっと精密に洗練したものという印象が強い。1975年。

図⑧

おいしい(美味しい) tasty		
▽ OISII	- NHTAA	▽ NMAHAN
● OISIIKA	- NMAEE	▽ MAASAAN
	● NMAKA	◀ MASAAN
! UMAI	● NMAGA	◀ MAHAHAN
! UMEE	● NMAKTA	▽ MAASAN
! UME	● NMA	▽ MASAN
! UMAA	● NMAA	▽ MAASYEN
! UMYAA	● MAI	▽ MAAHAN
! UMII	● MEE	▽ MAHAN
! OME	● ME	▽ MAAN
! UNMAI	● MAKA	◀ MASSAN
! UNMEE	● MAGA	● MAI
! UNME	● MAKA	● MAASA
- NMAI	▲ NMASTAAI	● MASA
- NMEE	▲ NMAASAAN	
- NME	▼ NMAAN	

この方法は、いわば国研方式とも言われ、日本各地で模倣され、普及した。もちろん、「日本語地図」に関係した研究者が、のちに、各地で、各自の取り組みを実施し、適用していった功績も見逃せない。

(4) 「奥隅川流域方言地図」の凡例について

1983年に、徳川宗賢教授の指導で、学習院大学の学生の作成した言語地図がある。図⑨は、徳川教授の凡例である。

カメンコムシという方言事象とカンバという方言事象とミズスマシという方言事象とが、特に大きな目立つ符号を与えられている。共通語形のゲンゴロー他の方言事象は、小さな目立たない符号になっている。このように、はっきりと目的を前面に打ち出した凡例は、正に解釈図の中でも、仮りに言ってみるならば、「説得図」とか「力説図」とか「読解図」とかと命名すべきものかもしれない。

しかし、人によっては、図⑧のように、符号の大きさが一定である方が、個々の方言事象の訴えを平等に取り扱った処置だと反論するかもしれない。これに対して、「日本語地図」に関与しておられた徳川教授が、強いて、図⑨のような凡例を、後につくられたのには、相応の学問的展開があったにちがいないと推察したい

図⑨

のである。つまり、どのように客観的に作図しようとしても、作図者の個性が発揮されるものである。それならば、言語地図から、言語史が浮き立つように、積極的に符号化をしてみよう、という立場である。これは、正当であろう。即ち、図⑨でも、歴史的には、UMAIの方が OISII よりも先行されなければならないのに、共通語を優先させるという原則を設けて、逆にしているのである。

したがって、図⑧と図⑨とは大差がないのである。

(5) 「兵庫岡山県境言語地図」の凡例について

1991年の発刊である。鏡味明克教授の編集されたものである。これは、先の「糸魚川言語地図」の配符法

図⑩

第32図	
イ	イカ
	イカ/ボリ
—	イカア?
●	イコ (豊田)
○	イコ/ボリ
∩	イカ
∪	イカ/ボリ
■	イカコ
□	イカアコ
⊕	イコカ
★	イカ/ベ
☆	イカ/ハベ
▽	イカ?

によく似ているかと思われる。語類間に隔てをつくらぬのである。しかし、同類内の語には、同じ形の符

号が付与されている。方言事象は、当該地方での基幹と見なされるものを先行させており、必ずしも共通語だからといって、優遇してはいない。あくまでも地方ごとの言語史をめざす方向に視点が置かれているようである。

(6) 「中国地方五県言語地図」の凡例について

1965年に、廣戸惇博士が主に独力で5県を踏破されて、言語地図を出版されたものである。美しい符号が

図⑩

Fig. 175 組 (manaita) chopping board

○ キリバン Kiriban	● マナイタ manaita
◐ キーバン Kiriban	● マナエダ manaita
◑ キリバ Kiriba	● マウケダ manaita
◒ キアバ Kiriba	● マナマナイタ manaimanaita
◓ キリボ Kiribon	● ヤマイマナエダ yamaimanaita
◔ キアバン Kiriban	● ショージンマナイタ shojinmanaita
◕ マナエダキリバン manaidakiriban	● マナエダ manaita
◖ マナキリバン manakiriban	● マナキリ manakiri
◗ ショージンキリバン shojinkiriban	
◘ ショージンバン shojinban	

多いのに感心する。凡例という欄が特設されているわけではなく、地図の左上の空白が主に凡例と定められ、そこでまかないきれないばあいには、空いている所を次々に使うという方式である。

図⑩は、図⑨と同じように、語類の境域を設定しないやり方を取っている。しかも、当該地方での主要な方言事象を先行させて扱い、共通語のマナイタを、優先させてはいない。これらは、図⑨と図⑩との方法のきわめてよく似ていることを物語る興味ぶかい点である。

(7) 「最上地方新方言図集」の凡例について

図⑪は、1980年に、井上史雄、永瀬治郎、沢木幹栄の三氏によって編纂された地図集の凡例である。線符号とアルファベット符号とが用いられている。

図⑪

-	(	60)	KDWA-
!	(	222)	BOCKED-
!	(	23)	BOCZYGO-
/	(	1)	BOCCU60-
!	(	33)	BUKED-
0	(	11)	BUCCYCZYK/GO-
!	(	5)	BUCYCU-
!	(	35)	BUCZC/ZI/UK/GO-U-
!	(	36)	SDNYTA

これは、コンピュータ利用のグロットグラムである。凡例はきわめて簡素であり、符号の大小も認められない。ただし、コンピュータ利用の図であるというところに、特色があるのであろう。一地点に2事象の併存も描き出されている。先述のヨーロッパ言語図巻 (ALE) の凡例ほどの精密さが、今後求められるべく

べきであろう。筆者はこの方面に不案内であるために、残念ながら、多くを語ることができない。しかし、今まで筆者は、凡例の質のことばかりを問題にしてきたが、図⑫では、方言事象の総量が記されている。この点は、さすがに、コンピュータ言語地図らしい凡例だと思わせられたことである。

(8) 「方言文法全国地図」の凡例について

これは1989年に、国立国語研究所が編集し刊行したものである。

図⑫

雨が (降ってきた)

● <ga> ga, ya	▲ <nu>
● <ga> ga, *ga	▲ <nudu>
● <gu>	▼ <nutu>
	▲ <n>
● <a> a, a	▲ <ndu>
● <(amea)>	
! <(amia)>	▼ <i>
● <e> e, se	
d <ja>	! <(AME)>
▲ <(amejaa)>	! <(amee)> amee, amej
● <(amjaa)>	! <(amii), (aamii)>
● <(amja)>	
● <(amea)> amee, amee	● その他
● <(ame)>	● その他の外に於ける他の語類の境界
▲ <no>	

語類ごとに分類がなされ、区分されている。格助詞の「が」に相当する部分のオーソドックスな表記になっているようである。先の「日本言語地図」のばあいと若干の相違が見られる。即ち図⑫の凡例は、図⑨のように、順番からすれば後半にあるものを共通語だからと冒頭に持ってくるようにはなっていない。

七、いわゆる「広島学派」の言語地図における「凡例」の歴史的構造主義

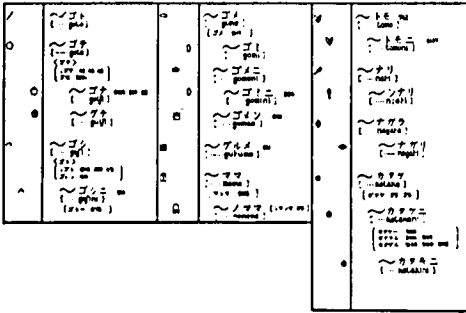
(1) 「瀬戸内海言語図巻」の凡例について

広島学派の元祖は藤原与一博士である。多くの独創的な考えを実行され、関与されたところで、必ず革新的な企てをされてきている。言語地図の凡例に三段階法を持ち出されたことは、特筆しなければならない。

次の図⑬では、副助詞「〜ごと」の凡例を掲げる。符号が三段階に出現し、従来の一本調子の凡例に慣れている目には、奇妙に映るかもしれない。しかし、これは、方言事象群の中での派生関係を構造化してとらえるのに有益である。又、諸事象間の距離が、微妙に

工夫されており、説明は無いが、注目される。

図⑭



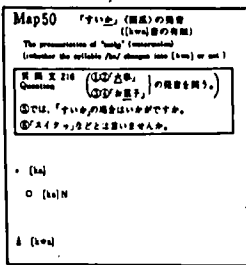
この凡例の最大の特徴は、符号ごとに、分布地域を代弁させたという点である。線符号は共通語、全域分布、三角形の符号は近畿域分布、丸符号は中国域分布、菱形符号は九州域分布、いちょう形と五角形の符号は内海東部分布、その他は特殊符号というようになっている。

多くの挑戦的な企てがなされた凡例であると思う。

(2) 「関東地方方言事象分布地図」の凡例

大橋勝男博士の凡例は、すぐ上の図⑬の「瀬戸内海言語図巻」の影響を受けて成り立ったものである。

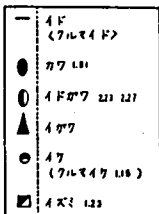
図⑬



符号が二段階に分けてある。ka/kwaをねらった図であることが示されている。1974年。

(3) 「下関市 北九州市 言語地図」の凡例について

図⑯

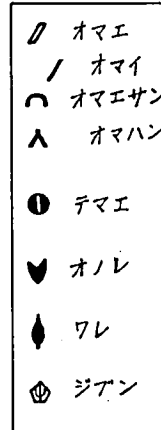


岡野信子教授の図⑯の凡例は、図⑭や図⑬とは異なり、符号が縦一直線になっている。最近のお仕事には、図⑬のような複雑さよりも、単純明快な凡例を趣向されたものが多いように察せられる。

(4) 「大阪市域言語地図集」の凡例について

佐藤虎男教授の指導による、大阪教育大学の学生らによる仕事である。1983年。

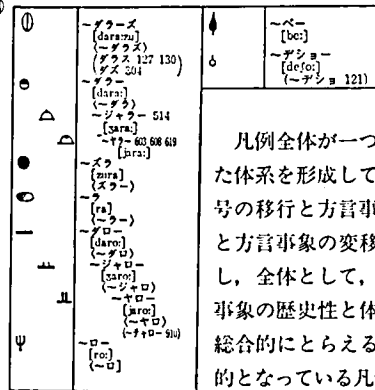
図⑰



「汝」の図の凡例に、符号の二段階仕立てが見られる。

(5) 「中部日本言語地図」(未刊)の凡例

図⑱



凡例全体が一つの独立した体系を形成している。符号の移行と方言事象の変移と方言事象の変移とが対応し、全体として、当該方言事象の歴史性と体系性とを総合的にとらえることが目的となっている凡例である。

これは、筆者による三段階法の凡例である。図⑱と似ている。ただし、共通語を優先しないで、言語史に忠実に答えようという態度を示している。

おわりに

巨視的にはあるが、世界の言語地図と日本の言語地図とを対象にし、その凡例の実態を掲げ、問題点を指摘した。広島学派の凡例には「方言事象体系の歴史的構造図」を構想した点に特色があり、独自性が窺われる。